

職責貫いた人々を描く視点の高潔さ

三河の哲人・鈴木正三

私はこのところ、講演がしたくてたまらない。昨今の世相に鬱屈(うっくつ)するものがあり、それを吐露する場がほしいのだ。

私の一族は三河岡崎で江戸期から酒造業を営んできたが、その本家筋の深田正義が酒蔵の1棟を開放し“市民大学”長誉館おかざき塾を作ることになった。その開講に際し、話をしてほしいというので先月25日、私は愛知県岡崎市に赴いた。

私が話したかったのは、三河が生んだ日本の「勤勉の哲学」の始祖鈴木正三(しょうさん)についてである。

鈴木正三は三河出身で、関ヶ原の戦いに参加後、武士を棄てて出家し、哲人として世人の胸を打つ、幾多の名言を残している。故山本七平氏が「日本資本主義の精神」の象徴として、何回か取り上げた人物である。

鈴木正三は農民から「自分たちは生活と労働に追われ、仏道修行の暇がない。どうすれば成仏できるのか」と聞かれ、「農業則仏行」と答えた。「農民はひたすら農業に励み、一鍬(くわ)一鍬に南無阿弥陀仏を唱えよ」と、職責の貫徹が仏教による救済につながるかと説いたのである。

「農人なくして世界の食料あるべからず」「商人なければ物通わずして万民難儀すべし」。こうした使命を抱くがゆえに農民、商人などの職業人には「仏」が宿る。自分の中の「仏性」を信じてひたすら職務に励めといい、僧職などは人民の寄生虫にすぎず、自分も来世は農民に生まれたいとて憚(はばか)らなかった。

「小説は自由でいいぞ」

先日亡くなった作家の城山三郎氏は、こうした職業倫理の貫徹に努力し悩んだ人たちを主人公に取り上げ、その生き方をたたえた点で鈴木正三と共通するところがあると、私は講演で話した。『男子の本懐』から『粗にして野だが卑ではない』まで、真の職業人とは何かを追求した作品であると。

講演後、ひとりの女性が近寄ってきて「私は愛知学芸大学(現愛知教育大学)で杉浦英一先生(城山三郎氏の本名)に教えていただきました」という。「ある日黒板に文学界新人賞受賞の新聞記事が貼(は)り出され、教室は大騒ぎになりました。それからまもなく先生は直木賞も取られた。深田先生も同じコースですね」。私は首を振った。

「違うのです。私の場合は最初の新人賞受賞作が直木賞候補になってから受賞までに23年かかりました。でも城山氏にはどれほど世話になったか、筆舌に尽くしがたい」。話すうちに涙滂沱(ぼうだ)としてあふれてきた。

城山氏は私の同人誌時代の作品を含めてよく読んでくれていて、当初から心を開いた親しいおつきあいになった。そして「小説は自由でいいぞ」という城山氏の言葉は、私がノンフィクションから小説へと重心を移す際に、強く背中を押してくれた。

私の『革命商人』が直木賞候補となったときは、選考委員だった新田次郎氏があとで電話をかけてきてくれ、「あなたの作品を支持したのは城山三郎、源氏鶏太、私だが、この本は“反革命の書”だ、と騒ぐ左翼系委員に対し、城山さんは終始ひるむことなくあなたを推していた。彼に感謝すべきだよ」と、選考経過を詳述してくれた。このときは反左翼的とみられて受賞できなかったが、城山氏の好意には深く感謝したのだった。

スマートで「卑」でない

城山氏は「文学なんだから人間を描かなくちゃ話にならん。だからおれはアーサー・ヘイリーを認めない」とよく話をしていて。その点私の作品は少しは氏の共感を得ることができたのかもしれない。

城山氏はいわゆる小顔でスマート、いつも身ぎれいで颯爽(さっそう)たる印象だった。一緒に講演会に行くと「おいあんたの髪は伸び過ぎだぞ。散髪屋へ行こう」と、私を散髪屋へ連れ出すのであった。

一橋大学のしゃれたイメージそのまま、私と妻は、慶応ボーイの向こうをはって“一橋マン”と呼んでいた。

長誉館おかざき塾での懇親会で、かつての彼の教え子や鈴木正三の末裔(まつえい)に囲まれ、私は最後にあいさつした。

「私は城山氏の全作品を高く評価するものですが、今日もっとも迫力をもって迫ってくるのは石田礼助国鉄総裁を描いた『粗にして野だが卑ではない』です。日本の経済界はいまや私利にまみれ『卑』の集団となったやにみえます。城山氏が教鞭(きょうべん)をとったこの地で悲憤の情とともにそれを語りたかったのです」

さらば、颯爽たる一橋マン。あなたは「粗」でも「野」でもなく、「卑」からもっとも遠い人であった。(ふかだ ゆうすけ)